

北欧につどいて I

一世界盲人福祉協議会実行委員会
(1981年5月4—8日 於ゲテンバーグ)一

社会福祉法人 日本ライトハウス
理事長 岩橋英行

目 次

序 文	24
はじめに	25
I. ゲテンバーグ会議におもう	31
1. 役員会(5月4日)	
2. アジア委員会(5月4日)	
3. 実行委員会(5月5日)	
4. 世盲連／世盲協 合同実行委員会(5月8日)	
II. 会議場にひろう	
1. ホテルラマダの火事	
2. 過ぎたるは及ばざるがごとし	
3. 世盲協ともお別れしたい	
4. スウェーデンの国籍を持つ日本人	
5. バスの中にて	
6. レセプションのひとこま	
III. 施設訪問	
1. 障害者専用病院を訪ねて	
2. 障害者の憩いの家を訪ねて	
IV. 英国ブライトンのジョン・ウィルソン卿邸とR C S B本部を訪ねて	

はじめに

1981年、それは国連が定めた国際障害者年 (International Year of Disabled Persons=IYDP)である。「完全参加と平等」、これは、1964年の第3回世盲協ニューヨーク総会にその芽ばえを見る事が出来る。

「盲人である前に我らは人間であり、これを基調にして、教育・福祉、職業を考えるべきであって、要は、盲なるがゆえの職業を考えて教育・福祉を思考するのではなく、個々人のニードに合った教育・福祉を考慮し、職業選択の自由のうえに、リハビリテーションや職業訓練をいかにほどこすべきかを考え、その結果としての Useful Member of the Society(有能なる社会の一員)たるべし』を主張した。その後、これを国連に提訴し、本年このIYDPを迎えた事は、ひとしお感無量なるものを感じる。

世盲協・世盲連の各実行委員が、北欧の国スウェーデン、ゲテンバーグに、友情を持って新たなる希望をたくしつつ集合した。

I. ゲテンバーグ会議におもう

スウェーデンの第二の都市、ゲテンバーグ（原名、イエテボリ）は、人口45万人で、スウェーデンの西の玄関口にあたる。日本で言えば、さしづめ大阪と神戸を合わせたような港町で、商工業観光都市であり、またアメリカ、英国、西ドイツ等からの豪華客船が、ここに錨を降ろす。更に、各国の労働者や移民達も、ここを利用するがゆえにメトロポリタン的要素を持っている。

最初、実行委員会は、オーストリアのウィーンで開く予定であったが、スウェーデン政府から「国際障害者年に因んで、ここゲテンバーグにおいて国内的障害者の記念行事を一週間続けて行うので、それを契機に世盲協・世盲連の実行委員会を開いては」との誘いを受け、昨年暮サンパウロの役員会にて、この地に開催する事を決定した。

会議の途中、泊まったホテルで火災が起きたり、福祉国家スウェーデンの行き詰まりを目のあたりに見る事が出来たり、種々実りある体験をした。特に今回は、朝日新聞の編集委員藤田真一氏が、国際障害者年にあたり、盲関係の記事を取材すべく、私と共に行動された。いつも孤軍奮闘であったが、今回は家内以外の人と日本語をしゃべる事が出来、かつ、過去においては、日本のマスメディア関係としては全く皆無と言おうか、海外の盲関係にスポットをあてた事のない状況であったにも

かかわらず、日本の最大新聞社である朝日新聞社が、特派員を派遣して取材をされた事は、特記されてもよいのではなかろうか。

以下、役員会、アジア委員会、実行委員会、世盲協／世盲連合同実行委員会の順に解説してゆきたい。

1. 役員会（5月4日 9:00～18:00）

昨年12月8～10日、デンマークのコペンハーゲンにおいて行われた定款改正委員会による定款改正草案がまとめられていた。その草案は、あまりにも極端な改正がなされていたので、好感を持って迎える人が少なかった。よって役員会前日の夜8時50分、ボルター氏の方から招集がかかり、ジミン氏(前会長)、コリガン氏(会計)、インドのデサイ氏、オーストラリアのウイルソン氏(副会長)、マレーシヤのウイニー女史と私が、彼の部屋に集まった。

改正案の中で、まず名称であるが、World Council for the Welfare of the Blindを変更して、World Council of the BlindまたはWorld Council on Blindnessと提案されている。その理由は、Welfare(福祉)という言葉が、Charity(慈善)と同義原であると解されたからである。列席者は全員、of the Blindについては、International Federation of the Blindの他にまたof the Blindを作れば、世盲連と協力するどころか喧嘩を売るようなものであり、話にならないと否定した。次いで、Welfareの意味であるが、コリガン氏が「WelfareとCharityを同義語に解するのは、英語を母国語としない国々の人々の誤訳で、オックスフォード辞典によれば、Well-being(良き存在を継続する)という意味である」とし、よって名称変更は通過させてはならないという申し合わせがなされた。

会費と投票権の問題では、まず名誉終身会員が投票権を剥奪されるならば、ちょうど「世盲協に対し多大の功績をのこして頂きありがとうございましたと感謝状を出しておきながら、明日から出入禁止」と宣言しているのと同じであり、また国際メンバーから投票権をはずし、会費を引き下げるならば、経済的にも世盲協は自立しないし、国際メンバーがもし嫌気をさして世盲協から離脱したら、世盲協の開発途上国への仕事は、ほとんど停止してしまうであろうという事で、とにかく役員会、実行委員会等において、かかる改正案を通しては、世盲協は崩壊するとの意見の一致をみた。中には、「この際、世盲協をつぶして新らしく作り直しては」という意見さえも飛び出る仕末であった。

以上のような、いささか緊張と興奮にみちた前夜の会議があったがゆえに、4日

の役員会は、重苦しい空気のうちに開幕した。

ノウィル会長の方から、「本日は、定款改正の件で相当深刻なところまで話し合いをしなければならないと思うので、出来るだけ冷静に、また寛容さと調和をもって臨んでほしい」との挨拶があり、岩橋の方から、「事務的な事は簡単に済まし、定款改正の部分で充分時間を取りよう、時間的配分を考慮されたい」との条件をつけて会議が始まった。

サウジアラビアのアルガニム氏が出席するはずであったが、胆石で急に来れなくなった旨の報告があり、連名で見舞電報を打つことにした。議題については、すべて承認された。但し、国際児童年についての件は、報告が来ていないのでオミットされた。サンパウロ役員会、会長報告については、前もって資料報告があったので承認された。次いで、実行委員会以後、スウェーデンで開催される全身体障害者のお祭りについての説明があった。以下、議題にそって重要討議のみ紹介する。

① 会計報告

コリガン氏より会計状況が発表された。一応会費収入は順調に入っている。特別寄金が収入予算より1万ドル減である。投資基金はロンドンの外貨市場の影響を受け好転しているものの、インフレ、アントワープ総会の報告書製作費、事務費等で支出増である。現在の残金は5万ドルであるが、そのうち4万5千ドルを投資に廻し、あとの5千ドルの配分については、運営費、援助委員会への予算に充当したいと考えている。本年度の見通しは、各委員会への助成、実行委員会メンバーへの旅費援助をしたにもかかわらず良好である。

② 実行委員の移動および欠席者

バングラデシュのチャウダリー氏が辞任したので、アジア委員会で投票の結果、スリランカのベンジャミン氏が選出された。続いて、今回の会議に限り変更を認めるものとして、カナダのマーサー氏の代わりにストーリー氏、アメリカのダンロップ氏の代わりにギャラガー氏が出席を承認された。欠席者は、韓国の李女史、サウジアラビアのアルガニム氏、ブラジルのアンデラーレ氏、デンマークのジェンセン氏、アメリカのスミスダス氏であった。

③ 加盟申請国

新加盟国のうち、キプロス島についての説明と提案があった。この国は、ギリシ

ヤ系住民とトルコ系住民によって国が2つに分かれている。例えば、英國における大使館でも、ギリシャ系、トルコ系大使館が、向かい合わせでキプロスの旗を立て、「自分のところが本家だ」と主張している。既に、ギリシャ系からfor the blindでメンバーが登録されており、トルコ系の方からof the blindで加盟を申請している。この際、世盲協側でどれか1つを選ぶと、ギリシャ系とトルコ系の喧嘩になるので、岩橋の方から「本年に月末迄に、自国内でいずれか1つを決めて加入を申し込み、世盲協はそれを承認する事」を提案し、可決した。

モンゴルの加盟であるが、この国は既に国連にも加盟しており、前会長ジミン氏もこの国を訪問し、調査済である。少数民族であるが、盲関係事業については熱心であり、国連を通して加盟申請が出ているので承認され、アジア委員会に編入される事が決定された。

次に、P L O（パレスチナ解放機構）から申し込みであるが、国連においては、P L Oは正式国家として承認されではおらず、代表部という形で認められている。よって、岩橋から「台湾においても見られるように、台湾代表という形ではなく、自由なる準会員という形で加盟を認めているのと同様、P L Oも準会員の席を1つ認め、中近東委員会がよく検討した上、国連の動きも見定めつつ正式会員になるよう、前向きに検討してはどうか」と提案、ボルター氏、ジミン氏、アーナー氏から賛意が表せられ、準会員となった。

ウガンダであるが、以前に会費未納入のため除名されたが、今回of the blind、for the blindの団体を作り、両者が仲良くして会費を納入するという条件で、再加入が承認された。同じくケニアも再加入が承認された。ペルーは、過去5年間会費未納入で、副会長プラデラーコボス氏が何回も折衝を持ったが、音信不通であったにもかかわらず、突然また会費を払うと申し入れがあった。しかばば過去5年間分を納入しなければ加入は認められないで、一応除名という形にして、本年から新しく再加入という形式をとり、継続加入を承認した。

④ 会費滞納国

コロンビア('80即刻加入約束)、コスタリカ('79、'80)、エクアドル('75～'80)、エルサルバドル ('80)、エチオピア ('79、'80)、ギリシャ ('79、'80)、メキシコ ('79、'80)、ネパール ('80)、スリランカ ('80即刻納入約束)、ナイジェリア('79、'80)、ルーマニア('79、'80)、セネガル('78～'80)、チュニジア('78～'80)、トルコ('76～'80)、以上のうち2年以上の滞納国は、定款どうり解釈すれば除名という

運びになるが、一応各々の地区の副会長と地域委員長が、穩便に交渉し、内意を聞くことにした。しかし、チュニジアとトルコは、はなはだ不明瞭であり信頼出来かねるので、今一度催促のうえ返答なき場合は、自動的に除名する事になった。

⑤ 委員長の交替

社会開発委員長デンマークのジェンヤン氏より、南北問題はあまりにも難しく委員のなり手も少ないという事で、辞任の申し出があった。しかし同委員会ほど今日では重要なものはないので、ドイツのガイスター博士またはガテマラのデスター夫人のいずれかを候補に挙げて、明日までに内諾を得るよう、事務局長が交渉することに決まった。更に、この委員会中、サブコミティーとして盲児に関する委員会が設置されているが、これは新委員長の下、委員がその必要性の有無を検討した上、存続、廃止を決定することにした。

開発途上国援助委員会委員長は、H K I のハロルド・ロバーツ氏であったが、本年秋をもってH K I を引退するので、後任としてスウェーデンのハガマルム氏を推挙する事に決定した。（注：元気で今回の会議にも出席し、開発途上国から慈父のごとく慕われていたロバーツ氏は、本年6月13日ニューヨークの自宅において、心臓発作のため急逝された。全世界の盲人関係者達は、彼のうえに深い哀悼の意を送った。今、彼の遺徳を偲ぶべく「ハング・ロバーツ記念基金」を設けるため、全世界に広く募金の呼びかけがなされている。恐らくその基金は、開発途上国の失明防止と盲教育のために活用されることであろう。）

文化委員会委員長ノウィル夫人は、会長と委員長兼任は荷が重すぎるという事で、イタリーのケルベン氏が推薦された。尚、同委員会は、現在国連の版権委員会を通して、盲人の点字、録音物に対する版権の無料化を運動しており、盲人の芸術、文化の向上に今後大いに活躍を期待したい委員会であるため、全員ケルベン氏を推挙した。

⑥ 次期総会地

開催を断わった国々は、カナダ、英國であり、カメルーンとニゲールは、自国では出来ないがアフリカでは非開催してほしいとの希望があった。しかし、バングラデシュ、中近東委員会、フランスの3国から、開催候補地になりたいとの申し出があった。イタリーは、1989年ならば引き受けられる、イスラエルからは引き受けたいがどのような準備をすればよいのか、韓国からは、日本かナイジェリアでといった書簡が寄せられていたが、中近東とフランスにしぶって討議がなされた。フランス

の場合、1784年、バランタン・アウイによって世界最初の盲学校が、パリに創設された。1984年は丁度200年目にあたる。第1回パリ総会が開かれた事も銘記して、パリ開催を切に要望して来た。但し、フランスとしては、通訳、会議場、会長レセプションを負担するという条件であった。しかし、中近東委員会は、中近東のいずれかの地で行う場合、サウジアラビアが一切の費用を負担し、参加者は旅費だけを持ってくればよいというものであった。しかしアントワープ実行委員会において、総会開催地は共産圏・自由圏を問わず、平和の地であって誰もが参加出来る国を総会地とする事の決議がなされたが、中近東はあまりにも問題が多く、出入国に支障があるのでと懸念する向きが多かった。岩橋は、経済的理由は別として、フランスが望ましいと主張、ブラデラコボス氏が経済的理由を主にして、前回の総会決議を考慮しないことにし、中近東を推した。その結果、反対一票で役員会としては、フランスを候補地として実行委員会に提出する事を決定した。

⑦ 世盲協／世盲連 合同ワーキング・グループ報告

世盲協、世盲連から、同じ調査用紙を加盟国に発送し、すべての国から丁重な返答が返って来ている。しかしその中で、ofとforの団体が協力して仲良くやっているところもあれば、盲人団体の目にある独走で混乱を招いている国もあり、まったく盲人不在の盲人援護団体優位の国もある。このワーキング・グループとしては、世盲協代表会員のofとforの人数分けに対して、出来るだけその半数をof the Blind(盲人団体)で占めるようにする事が望ましいとした見解を取っているので、調査回答をチェックの結果、必要な国々に対しては勧告を行なったという、委員長ボルター氏の説明があった。日本にも、世盲協より、「of the Blindの代表が1名であるので、考慮されたい」との書簡が、日本盲人福祉委員会の方に来ていた。そのため、今一度岩橋の方よりボルター委員長に説明を求めた。「日本の場合は、ofとforといった単純な分け方ではなく、日本盲人会連合、日本盲人社会福祉施設協議会、全国盲学校長会といったものプラス学識経験者で、日本盲人福祉委員会理事会、評議員会を構成し、これが世盲協のナショナル・ボディーとなっている。この中から代表会員を選出しているのでofは1名となる。ofについての見解の相違であるが、施設や学校の長で、盲人であってもofとはならないのか」と質問した。ボルター氏は、「我々ワーキング・グループの希望としては、あくまでもofとforとが同数というのが理想ではあるが、しかしこれを押しつけたり、その国の内政監視をしようとは思っていない。自国の自主性にまかせている。施設や学校の長が盲人であっても、これは

ofとはならない。ofとはあくまでも盲人だけで組織した団体を意味する」との答えがあった。ここで、ジミン氏から、最も難かしいこのワーキング・グループの委員長をつとめるボルター氏に対し感謝の意がのべられ、全員同じくボルター氏に感謝の拍手を送った。

⑧ 定款改正

最も発言多く強力な反対の意を示したのは、前会長ジミン氏と会計のコリガン氏である。コリガン氏が、これ以上話していたのでは明日までかかる。とにかく実行委員会で、逐条審議していたのでは時間がないので、役員会としては重点を決めて反対の意を表明しようという事になった。

- 1) 名称については、昨夜の話し合い通り Welfare (福祉) は Charity (慈善) の意味を持たない。よって名称の変更は不必要である。
- 2) 名誉終身会員から投票権を剥奪してはならない。
- 3) 国際メンバーを援助会員に格下げし、会費をおとす事は、世盲協として 6 千ドルの収入減になるため、世盲協の開発途上国援助計画はすべてストップする。よって現行どおり。
- 4) 定款改正是由ると、盲人団体とは、盲人が集合して作られた組織団体であり、年ごとに定額の会費を盲人自身が納入、役員を定期的に民主的な方法で選出し、ルールに従って自主的活動をしているものを言うとあるが、一見、要を得たごとく見えるが、開発途上国のようにその日の食事さえ事欠く人々にとっては、会費どころではない。極言すれば、開発途上国では、盲人団体が作れなくなるので、この提案を否決。

以上、ほぼ 4 つの点に重点を置き、役員会としては、次のコメントをつけて提案したいという意向であった。

コメント① 役員会としては、本定款改正案に反対する。

コメント② 再度、定款改正案を作るに際し、役員会の介入を認める。

しかし、ジミン氏が再度、「Welfare と同じ言葉がソ連にもある。それは決して慈善という意味ではなく、正しく生きるという事であって、これが慈善の意味に解されるのであれば、ソ連の福祉は大きく変更されねばならない」と反対の意を表明した。アーナー事務局長から、定款改正委員会は独立した委員会であり、役員会が介入するのはおかしいではないかと、異議の申し立てがあった。ノウィル会長が、定款改正委員会たりとも、世盲協の一委員会であると反論し、コメント②の事項は、

「介入」を「協同」の字句に変更して長い討議は終了した。

⑨ その他

白杖マーについて、提案者のピーラッシュ博士は、提案理由の説明として、既に実施されている各国の“白杖マー”的様子を聞きたいのであって、世貿協で白杖マーの設置を要望したのでないとのべ、実行委員会で、各國より実情を聞くことになった。

次期役員会は、オーストラリアが引き受ける意向を表明した。3月中という事であったが、岩橋の方から、今回の実行委員会と来年の役員会が、同会計年度内になるので、4月以降を要望、4月12日から1週間メルボルンにて開催が決定した。

2. アジア委員会（5月4日 18:00～20:30）

実行委員会や総会が開かれるたびに、その機会を利用してアジア委員会を開こうという申し合わせにより、役員会終了後ただちに開かれた。

出席者は、委員長スレッシュ・アフジャ氏(インド)、副委員長ウィニー・イン女史(マレーシヤ)、H. J. M. デサイ氏(インド)、S. M. ベンジャミン氏(スリランカ)、副会長岩橋英行、オブザーバー藤田真一氏(朝日新聞社)が、アフジャ氏の部屋に集まり、委員会を開催した。

① 第1回アジア歩行訓練指導者会議（視覚障害研究第13号参照）

アフジャ氏の方から、本年3月19～21日、大阪において第1回アジア歩行訓練指導者会議が開かれた事が報告された。その大要は、[出席国8ヶ国、出席者11名であった。非常に周到に用意された会議であり、多大な成果をおさめた。アジアをA、B、C、の3地区に分け、各々のリーダーが選ばれた。A 南時哲(韓国)、B ムハメッド・アミン(インドネシア)、C リーナ・チャウダリー(インド)である。委員長は、日本ライトハウスの関宏之氏であり、コーディネーターはH K I のロバート・ジェイクル氏、オーストラリア行動訓練所長J. K. ホールズワース氏である。他の地域委員会には見られないアジアの誇るべきものである。特にマスメディア関係の方々が多数参加し、大々的に報道された。我々の願いは、ヒモつきや条件つきで日本政府のコントロールの下に、この歩行訓練委員会が動くのではなく、超経済大国日本に対し、無条件でこの会に運営費を多額に寄贈してくれる事を望みたい。それは甘い贅沢な話かもしれないが、我々の会に参加した日本の報道関係者が、こうした世論を作ってくれる事を期待したい] というものであった。

② 次回アジア委員会の開催

本年10月25～31日、世盲協アジア委員会と世盲連アジア委員会の合同会議がスリランカで開かれる事についての報告と討論があった。アジアにおいては始めての計画であり、この目的は、開催国の発展と底上げのために行う会議であって、その国で特に遅れている部分を議題として取り上げ、アジア地域としてはどのように相互に協力し合えるかといった事を協議するものである。当然、政府の参加も要請している。費用は、今回の場合はスリランカの盲人協会が募金し、インドやその他の国々でも援助金を出すよう計画している。この会議を10月に持つて来た理由は、本会議終了後、ICEVH(世界盲教育者会議)のアジア地区委員会が、11月1～6日インドネシアで開かれるので、そのためこのように日程を接近させて組んだとの報告があった。

③ アジアの会費未納国

ネパール、スリランカの世盲協会費未納国については、スリランカは即刻支払う旨を約束、ネパールは6月にアフジャ氏がネパールに出張するので、その際に明確にする事になった。

④ アジア基金

アジア基金は、第4回アジア会議(於、ボンベイ)において決議され、インドのNAB(インド盲人援護協会)と日本ライトハウスで保管する事になっている。日本の場合は、他に寄付を求めて誰も寄付してくれる者がないので、日本ライトハウスで毎年少しづつ蓄積をして来た。インドではNABが中心になって募金している。

今回、アフジャ氏が歩行訓練指導者会議に参加するため来日した際、インド政府は外貨持ち出しを固く禁じているので手元には500ドルしかなく、食費にもことかく有様であるとの事で、ライトハウス保管のアジア基金より20万円援助を要請、後日、アジア委員会の了承を得ることを前提にして前払いをした。よって現在 673,983円となる。以上を岩橋から説明、委員会の承認を得た。アフジャ氏は、スリランカのアジア委員会において正式承認を再度得ることを約束した。アジア基金の募金活動がマレーシャ、香港、等においてもなされている事が報告された。

* 以下は次号(第14号)に掲載いたします。